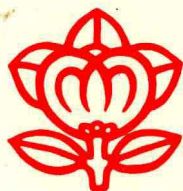


内村鑑三をめぐる作家たち

鈴木範久



玉川選書135

文学を嫌った内村。彼の門をたたきや
がて去っていった青年作家たち。両者
の交感と離別に見る内村と作家の素顔

人と研究シリーズ

内村鑑三をめぐる作家たち

鈴木範久著

町田 玉川大学出版部 1980

184 p 19 cm (玉川選書 135)

1. ウチムラカンゾウヲメグルサッカタチ

al. スズキノリヒサ sl. 文学史・批評, 文学思潮史

㊦ 902.

すずきのりひさ

鈴木範久 SUZUKI Norihisa

1935年生れ。病気で高校中退後、大学入学資格検定試験合格。早稲田大学、東京大学で学び、現在立教大学教授。聖心女子大学、早稲田大学、東京大学、埼玉医科大学の講師を歴任、比較文化論、宗教学、キリスト教倫理、日本宗教史、日本文学を担当。

著書『倉田百三—近代日本人と宗教—』(大明堂),『内村鑑三とその時代』(日本基督教団出版局),『明治宗教思潮の研究』(東京大学出版会)他。

現住所 〒350-04 埼玉県入間郡越生町越生 672-4

内村鑑三をめぐる作家たち

1980年12月25日 第1刷発行 ©

著者 鈴木範久

発行者 小原哲郎

発行所 玉川大学出版部

〒194 東京都町田市玉川学園

電話 0427-32-9111

振替 東京 8-26665番

印刷・製本 三秀舎

(分)1345(製)15111(出)4355

乱丁・落丁本はお取替いたします

内村鑑三をめぐる作家たち

序文として

「聖書一卷によりて、日本の文学史は、かつてなき程の鮮明さを以て、はつきりと二分されてゐる」と言つたのは太宰治であつた。同じような表現を借りるならば「内村鑑三によつて日本の文学史は二分される」と言うことができるかもしれない。近代日本の文学の歴史を少しでもひもとく人は、ただちに、そこにしきりと現れる内村鑑三の名を見出すことになるであらう。今述べた太宰治自身も一時は内村の書により、うちのめされた人であつた。

雑誌『国民之友』や『東京独立雑誌』を通じて内村の思想や文学論にふれた国木田独歩、正宗白鳥、魚住折蘆、小説「背教者」を書いた小山内薫、白樺派に属する有島武郎、志賀直哉、長与善郎、内村の没後とはなるが、その思想に強くひかれた太宰治、亀井勝一郎、保田与重郎などの日本浪漫派の人々をはじめ、その数は多い。もしこれらの文学者の名を除いたならば、近代日本の文学史は書けないということは、少くとも言えそうである。

ところで、この文学者たちのなかには、その若き日に、長期にわたり内村のもとに通つて聖書を学びながら、そのもとから離れた者が多かつた。それは内村やキリスト教側からみるならば

「背教」であり、「落伍」とされた。他方これを文学者たちの方からみるならば、内村の厳格な倫理主義、狭量のためとされた。しかし、それでは最初から両者の間が、あまりにも平行していたことになる。両者の間には、もっと交わる面があったはずである。内村は倫理主義を第一義的にふりかざしたキリスト者ではなかった。その倫理主義に躓くことより信仰の始まるという教えが、まったく伝わらなかったとは考えがたい。それに離脱にしても、不健全な「落伍」としてではなく、青春における魂の流浪のなかでの一コマとでもいうような、今少し健全な見方ができるのではなからうか。

そのうえ、内村とても、生身の人である。思想や人間は決して固定していたのではなく、常に動いていた。またそれぞれの人の内村に接した時期による受けとり方の違いもあれば、誤解もある。のちに述べる正宗白鳥のように同じ文学者でも時期により内村観には変化がある。

個々の文学者と内村やキリスト教との関係はすでに多くの論及がなされている。しかしながら、今述べたような視点で内村鑑三と文学者たちをまとめてとりあげたものは無きにひとしかったと言えるであろう。本書は、比較的年若い読者たちのことも考えて、それらの文学者と内村との関係につき、一般的なことがらも記している。ただし、一般的、常識的となっていた事実でも、誤りが常識化していることもあるので、それは極力正そうとした。

本書で、内村と文学者たちをみるにあたり、重要な手がかりとしたものの一つに、「自然」とい

う考え方がある。「自然」という言葉にはいろいろな意味がある。そのうえ、本書に登場する文
学者たちについても、それぞれの「自然」観については、論じられたものも少くない。ある面ではそれらと重複することもあるだろうが、若干のニュアンスの相違もあるので、最初に、ここで用いる「自然」について少し説明を加えておきたい。

内村鑑三の唱えた無教会主義キリスト教を私は、「人工」的キリスト教に対する「自然」的キリスト教と解している。この「自然」的キリスト教の内容として「純化」、「原型化」、「野性化」の三つの要素がみられる。それらが無教会主義キリスト教にどのように表現されたかにつき、かつて書いたもののなかで次のように述べた。

第一の「純化」とは、簡潔化、単純化ともいってよい。これは、鎌倉仏教にもみられるように、外来文化が、受容され日本化されるばいの一つの特徴であるともいわれている。内村の無教会主義キリスト教にあっては、キリスト教のあらゆる制度や形式的なものは、絶対不可欠なものではないとして排除され、ただ聖書と信仰とのみに単純化される。

第二の「原型化」は祖型化ということもできる。第一の「純化」とは重なるところが多いが、必ずしも同一ではない。すなわち、キリスト教なら、その発生のときを範として、そこにたち戻ることをいう。このことは、何も無教会主義キリスト教ばかりではなく、ある程度どの宗教にも共通する現象であるが、とりわけ無教会主義キリスト教においては「イエスに

かえれ」ということが、他（キリスト教の諸教派も含めて）と比較すると、相対的に強調されているようになれる。

第三の「野性化」は、未分化もしくはカオスに近づくかんとすることと言ってよいであろう。そこには、聖職者とか平信徒とかの区別はむろんないし、儀礼についても、もし洗礼が必要ならば夕立の雨を利用してよく、聖餐にあずかりたいならば野ブドウの汁でもよいという考え方である。言いかえれば「野性化」は硬直化に対立する。内村の教会観や儀礼観は、ときには制度的なものを肯定したり否定したりしていて、矛盾とみられることがある。しかし、それは矛盾というよりは固定化をしていないことの表れなのである。一定の型にこだわらない点では弾力性と言ってもよいであろう。また「野性化」は、文字通り荒けずりな生々しさを意味する。ゆえにその教会の「天井は蒼空」であり、その床は「青い野」でもよい。そしてそこから直接に神の声が聞かれ、人の行動は、それに促されるままの自然なるものがよしとされるのである（『内村鑑三とその時代』、日本基督教団出版局、一九七五年）。

このように、内村の無教会主義キリスト教を、「人工」的、「文明」的キリスト教に対する「自然」的キリスト教であるとみた。

「自然」という言葉は、前述したように、きわめて多義的な概念を有する言葉である。（一）山川草木を意味する「自然」もあれば、（二）人の手を加えぬ意味の「自然」もあり、（三）心のあ

りのままに従う「自然」もある。また「四」究極的実在として人格化され、神化された「自然」もある。それらが多義的でありながら、なおかつ「自然」と呼ばれるのには、そこにおのずと一つの共通性をいくらか共有するからでもある。

私が右に記したように内村にみた「自然」は、一部では山川草木を意味する「一」の「自然」とも重なりつつ、そのもっとも中心となるのは「二」の人の手を加えない意味での「自然」である。それも内村にあっては、とくに近代的な人間の手になるものと対照的な「神」に導かれるままを表す。

本書において、文学者たちの「自然」をみるにあたっては、内村のように「神」に導かれるままというような積極的なところは除かれるが、当然「二」の意味の「自然」である。近代的な人間の手の加えられたものに対立する意味における「自然」であり、わざとらしさ、人工や技巧、虚栄、虚飾、偽善に対する概念を呼ぶことにしたい。

次に私は、文学者たちにおける内村鑑三の位置を、彼らの若き日における精神の彷徨のなかでとらえようと思う。それは、他の動物となんの変りもない「ヒト」として生れた人が、人生の旅に出て、遍歴を重ね、心身ともに「人間」となる過程のなかで内村との出会いをみることである。このような意味での「自然」と、「ヒト」から「人間」へのプロセスに位置づけて、文学者たちと内村鑑三とをみることは、おそらく両者の間に、従来考えられたほどの対立をみない見方とな

るであろう。しかも、そのことは、文学者たちが内村のもとを去つてからのことについても、あるいは、その作品においても、影響を多く与えることを予測させる。しかし、それにもかかわらず、内村との相違は相違としておさえなくてはなるまい。このような意図が、本書にどれほど十分に生かされたか、あまり自信はないが、文学者たちと内村鑑三との関係を総合的、学際的に把握せんとした、一つの試みとして読み下されば幸いである。

内村鑑三をめぐる作家たち
目次

序文として	3
一 「大文学」論とその反響	13
二 国木田独歩	25
——吾れ非常に此の剛毅なる人物を慕ふ	
三 正宗白鳥	37
——私が最も畏敬した日本人は内村先生	
四 魚住折蘆	53
——個人の感化は内村先生を第一	
五 小山内薫	65
——先生のお蔭で新しい生活へはひることができた	
六 有島武郎	91
——彼れが堅信と憚らざる自信。尊き哉	

七	志賀直哉	111
	——影響を受けた人々を数へるとすれば師としては内村鑑三先生	
八	長与善郎	131
	——先生を日本が嘗て生み得た人物中最大の人物として挙げる	
九	日本浪曼派の人々——太宰治、亀井勝一郎	149
一〇	中里介山、芥川竜之介ほか	167
	後記として	177
	参考年譜	180

一 「大文学」論とその反響



内村鑑三は、いわゆる文士と、その文士の手になる文学は嫌いであつた。後年、その門より去つて文学に走る者が多く出たために、その反感はいちじるしく増幅された。「文学は基督教を解せんと欲する者の扱むべき最悪の途である」(『文学者の信仰』、『聖書之研究』二二八、一九一九年七月)というほどになる。

ところが、内村が、最初から文学そのものを嫌つたかという点、決してそうではない。彼が、はじめて文学と言ひうるものに触れるのは、一八八五(明治一八)年にアマスト大学に入学し、ドイツ語教師H・B・リチャードソンより、レッシング、シラー、ゲーテなどの作品を習つたときであつた。ことにアマスト大学での最後の一年にゲーテの「ファウスト」を読んだことは、文学への目を開かせた。

ドイツ語の教授は、私の知るかぎり、最もおもしろい人でありました。ゲーテの「ファウスト」を読まされましたが、彼はそれに少なからず、自己の感情をまじえることによって、その書を私にすこぶる興味あるものにしてくれました。その悲劇は、私を天雷のようにうちのめしました。私は、今でも、その「この世の聖書」を聖書の次に愛読しています(英文『余はいかにしてキリスト信徒となりしか』、一八九五年)。

内村は、ゲーテの「ファウスト」を、聖書につぐ「この世の聖書」とした。それは「智識的大世界」であり、「一巻の中に人事の凡てを尽せしもの」(『流竄録』(三)、『国民之友』二四一、一

八九四年（二月）とみた。しかしながら、内村は、ゲーテにより文学へ開眼すると同時に、文学の害にも気づいている。

フハウスト劇は吾人を人たらしむ、其益此にあり其害此にあり、吾人は(human)たるの大を知りて神(divine)たるの欲を棄つるに至る、人界の大をフハウスト劇は示せり、其作者は魔術家なり、彼は羸弱罪深き人を以て彼れ自身に於て満足すべきものとして描きたり、妄信者を軟らぐるに偉大の功あり、衆生を導くに偉大の害あり、フハウスト劇に接して予は人として予の有する特権の大なるを悟て天佑の要を感じざるに至れり、ゲーテ彼れ自身が彼の読者に対するメフキストーなり（同）。

ここに語られている文学観は、その晩年に及ぶまで大きくは変らなかつた。偉大な文学はよく人間を描くことができる。しかし、そのみでみずから足りる人間をも描いている。それが、益でもあれば害ともされる。内村は自己をもっとも魅するものに、もっとも危険を見出すが、文学にも、その態度は表れている。食わず嫌いによる文学への反発ではなく、その美味をよく知るための反発であつた。それもとりわけ、「神」を忘れ、自己完結的な人間を描いた近代の文学に対する嫌悪である。一八九一（明治二四）年一二月に、内村は、『六合雑誌』に「ダンテとゲーテ」なる一文を寄せているが、そこでもダンテを「中古」の代表とみるのに対してゲーテを「今世」の代表とみている。ダンテが外形よりも精神を求めたのに比し、ゲーテは精神よりも外面の美に関